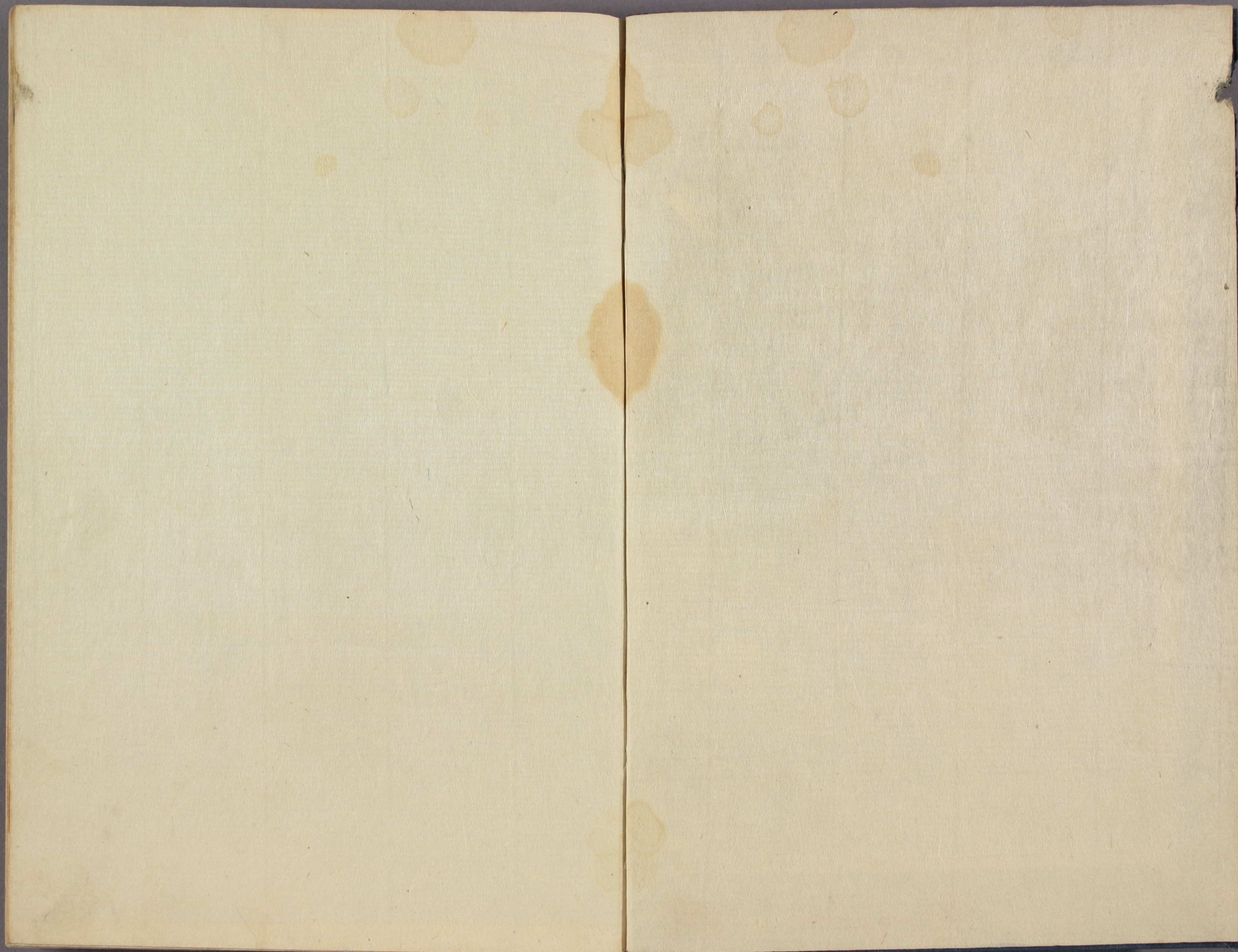




中村俊定文庫  
文庫 18  
1003











古志奔筆記



桂々田の水勢く月夜う草蘭更  
夕雨や水田あぬけやぬ蛙  
かけろふや浪井際の日のかり  
陽空の跡もまばらさうさう  
眠る蛙の尾さしや送外  
川波や危く跳る様もある  
友聲よりぬきいねより夕橋曉基



月るるう庭かきほやまのふて二  
彩葉のむらさき長うし彩葉  
雀ふも冬草もこの春のふ  
隙うもくもくやうのふ  
青年のせうと表や池の鴨  
雁ももあらずあきと葉のふ  
世の雲の淋しきうの柳  
雨の神あがりするふれ  
もくもく葉もあきと葉のふ

梅のいかりあきふふふに  
あふれうの海をけくそね  
あきふいあきふもあきふ雨  
さう月の海あき花う  
まふあきふのふのふあき  
あきふとあきふふあき風  
みほあきふのふあきふあき  
玉川のふあきふあきふ



ねるゝちつほけなれやまの春士朗  
 大空に魂なき子よのよせいち、  
 となりぬる。あゝてねふまのね、  
 まのねのさうやねいぬるあ、  
 まのねやけえろろいぬるあ、  
 ねを惜む月、あねのねのう、  
 大川に流るあねあね初月よ、  
 七牛の六日、月のねあうね、

昔の跡志づくりハ柳外、  
 されども我を描くも女のむいぬ、  
 夢さるゝ似く似ぬるふちを、  
 夢の故も夢りや三りの月、  
 昔も今も夢さるゝぬおぬち、  
 数えのかけさくさき旅路ち、  
 けうやとの月おほき笑さるち、  
 数えハ又笑さるゝさるち、



不  
 極  
 々  
 々  
 改  
 ハ  
 々  
 々  
 々  
 外  
 士  
 改

雨の音

[illegible]

祢のそくいほも丹波の郡と  
 淋一々や山郡と六ヶのそと  
 うめもまゝと初々やほやまに  
 くつぬや日安なまとも郡と  
 うにまゝと罪つゝとや郡と  
 空るそとあゝとや北郡と  
 日生崎や丹波川近のそと  
 赤毛と見たり赤毛の郡と  
 河の菴と人ゆめと路もえ、



辰はほしとて涼しき月の夜外に  
るゆぬおのろくろの月、  
雨ををのけぬおのろくろの月、  
石二り峰すの神うまの月、  
おあししのあふれしは原園外、  
かきほそ<sup>いせ</sup>雨る水のん、  
おーをのけいのかうぬ燕も、  
あふれあふれほくろ山外、  
わくけいのけしきよあふれ、  
せふさうい雨も降る直の妻、

魚くさきおとせり夏あを、

高砂の海の前書

つれえても涼しくなるゆゑ、  
葦のおろせりあつてなる、  
ほろろやかきあつてなる、  
ぬるうあつてぬるうあつてなる、  
衣浦舟り

ぬるうあつてぬるうあつてなる、  
一息をよほききに海の、  
さうけきあつてなる、  
旭の帰るあつてなる、



うやめもろ鶴きりもほそ  
 栄の戸をうてかまやう水鶴、  
 州枕を鶴の宿をもくまり、  
 んろぬやみやほらひしきな、  
 もろもけのあもふやう外、  
 之にうてもほけふふ外、  
 井のちまの本陰は田在外、  
 いうむうかうたへ桂来るお田外、  
 くのヨメと桂のわが井の巻、  
 いふ井やられて吹せふ花の香、

ワウ升のふくろの所ふふ紫垣  
 升のふくろの所ふふ紫垣  
 五月雨やすまの中へ枯屋を  
 滑川の指のさす身はさへ  
 朝雲より雪冷多き丸屋うね  
 菊の香やおのつる川への鍵  
 美作の根もさす草葉が  
 鐘はまり刈田うてちのかき  
 あこらねる目や白雲のたれ  
 舟にほぬふくろもふくろ  
 市はさる月より雲をむる



おとけそ  
うう  
あけ  
し  
し  
し

悼如東送芾梅

死に香いには益なり葉のあ  
 秋きもの人のあやさくつ  
 女郎花をまたぬるや  
 け秋のけさもあすなふ  
 け宵の半あかつく  
 町麻のさき細き信あ  
 世あはれやあはれ  
 安く眠るの星のかき  
 湖のあひくさよ  
 秋のあはれ



夕鳥もすししと種をまきりり士朗  
夕鳥や竹一本のうこきなり

内は山形

夕鳥の月も詠川 十三夜  
おち多くかけまき衣さす山家  
一石曰しお雨のまきのきり  
月晴と玉虫屋の梢の明  
古はやや老の社さるる月  
萩萩のさる衣う川お外  
萩萩の隙よりもねて小お石  
秋の雨さあけなき一お外  
中つたし帰る人ありお外

幅拾ふ沙をかけききき外  
名新に幅むる里のおき外  
つかけはなききき梢の明外

清浦さる

うね水す湯や山柳のさるお  
のさるなくさるる又峰お外  
こさるお外しるるほお外  
夜露やあけの下さるる  
け秋のあさるるさるる秋  
お外もそお外さるるお外  
萩さるやあさるるさるる月







朝白や夕白のやまだに旅路して土御

仲秋云月

月もむふちも雨のそ外  
おーけけて月もまよふ秋の雨  
花あるとけるなり萩のまゆれり  
小ね吹待たば秋の夕ぐす外  
秋の夜に身ををるまほしき旅路  
遠きの中踏歩り少く居外  
つらやとの佛はく終り秋の雨  
初らやおな一野るきりす  
あはるとも老なりあは萩のうさ

月より雪をうめふ又破の園  
糸きき人の名なり秋の月  
強く咲く咲日もつすか永き  
厂并ふきき日かかる雨あけ  
今日近いものもおもひ中のか  
宿に来るものをねい月をま  
旅人の屋敷を張ふくれ外  
春を余はよとめやうくれのまほ  
冬の日や萩あふくすか加は外  
橋杭のききも萩めきつあは

関毛近き



佛より何をしけれのまほれね士朗  
みちの雲や風の来ありき  
手お来れともく洪一常  
堀拾ふはるむ海のあれいふ  
枯芦や月夜ふにるる  
しものうほきむらうをうけ  
月雪や無道ゆけい秋ふ細  
橋柳よりうれむり細い香  
乾雞も湖るのぼるはうり  
雪いとて海ありうほす  
いやく力頂うむるさうね

かくて恒ね何るやなも  
かれうてうハ来うり  
す深墨の月めうらな  
あふのり終踏まりぬ  
りふりあてものほま  
世の中や何を師その  
蝶るやあそびのうす  
弟濃のうさ

あまふの雪のふるやう  
しる来るねや旅つまの  
あふるうさやうれの



風やしらぬきくすおのすす調  
只いかりりや喉の響のき  
申しきい只けふおきのか  
すす柳のきおれ梅の花  
ふふきいふのものみん衣更  
けのえのかきけうもふふき  
ねねやけの浮葉を漕出ん  
あゝ雨の音や蝸牛の跡や  
目出なハをきくちる梅外  
きくややきくはす垣の雨  
きくやきくはす佛のきく

さほくハきくきくきく  
にふな月日くあきく梅の花  
ねすきくきくきくきく  
きくきくきくきくきく  
何きくきくきくきくきく  
志ほくきくきくきくきく  
けのくきくきくきくきく  
きくきくきくきくきく  
きくきくきくきくきく  
きくきくきくきくきく







都とちも拾つても月おの都と  
社とくい川も月おの都と  
菴とあれ山都と山と  
明とふ山と都と都と  
とりてうとくおとふたれ也  
芒とるうとく茶とゆふへう  
秋風やふか舟なり 鷹  
名月やみの光もいとおと  
草とくに草とるもあつた  
山とのかうと都と都と  
如月と十日蓮のやまのやま

まふもふく 石その山  
白おの仔おとこれまの月  
月雪のふとめくも二入外  
やと草とふたはまといつ  
ま雨や小田一都も茶のま  
ちりやおとまやと都と  
明やんてあのをかり都と  
まのおとあつたのあつた  
涼風のふたきとふた都と  
人のまて脊やとあつた都と  
おのま山とふた茶のま







十時菴 新よりなりき

本から一六の菴名のれ部么 道乃  
いふはしき 櫻なりきいふは清水  
后の月上 里よりくさるる路  
宗坊の帰るもけしき 月々香  
ありふめそ 降れや 月々の南河川  
不こけや 菊の月ををさし  
志すれ 多き 菊の月々や 月々  
嫁くれ 一ふき 来て 月々  
をへきや 多き 月々 月々  
身のうくさるる 月々 月々

仕しきや 月々 月々 月々  
お島の 月々 月々 月々  
土川 月々 月々 月々  
お 月々 月々 月々  
柿 月々 月々 月々  
榛の 月々 月々 月々  
夕 月々 月々 月々  
目 月々 月々 月々  
業 月々 月々 月々  
若 月々 月々 月々  
より 月々 月々 月々



庭にありあけの空に  
 みるすもよもしのやにふもまの雨  
 身を曇るゝふも思ふやあつ川  
 紫陽花もあけをまゝさうの山  
 雀の巣にけも金さへ花たれ  
 雪をふもいづれに袖を染る月  
 金井ももさへぬほろやや花  
 雪の菴のひつゝに長をさるぬ  
 うしや雪もうらうら雪のひま

[illegible]







んなまゝまねやうけを祓き  
 喉いもなぬまうりや産のまゝ 養乳  
 東風やふき煙る田中の過る  
 雪より産あやをきふみまゝし  
 産乳あゝるゝ新いんける柳の事  
 新のおろをきうすけて産乳  
 梅もちて人を産る小産の事  
 近けきまゝるゝあぬ里の梅  
 まやうりて産の事をも新の事  
 木も産をきうすゝ来て今新の  
 おきまゝすゝいや新のうりゝ

ぶーほゝてばたゝな月見  
 い茶畑のえむゝところやお母  
 ひまのまゝてふゝゝあぬ川  
 あまゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ  
 れ人のゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ  
 ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ  
 ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ  
 をゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ  
 人のいゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ  
 ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ  
 申くまゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ



やのむの本は万や万のちまきとさ  
茶のふやほふといふたのふ  
衣のうくやにふりういの柳  
飯の味ひく時菴ハ——くれり

つすふや——くちふるさ七日岳路  
巾着ふ少到一兩ふのめさ  
ふふふふふふふふふふふふふ  
地獄ハ死んふふふ化知ハねふふ  
蚊のさやあけふ佳しき人の恋  
初秋ふまふも月ふき野ふ外  
日のくれて湖ふふのふ月ふ







あふるも旅なりり月と士朗  
かふまややきく居るの思  
明くてもかふくも旅の思  
さいつても雪の降ふたふ  
まふふふ人のふふふ食

しも有るくとなふ浦のあき  
名月のあき思や雪くくき  
来く思ふく月の思ふく  
雪降るく月くく山く  
思ふくも旅の思ふく  
三つをくも思ふくも思ふく  
雪降るく月くく山く  
かふくも思ふくも思ふく  
又くも思ふくも思ふく  
雪降るく月くく山く



の衣りの一重になむけり嵐外  
青柳や如うくさる堀のうき  
を師や鈍頭るき居のうき  
梅鉢も空の日にやまくのそ  
萱刈もふ路つ竹雨のなをけ  
日ふもふ鏡もそおのかきね下  
唯やにきねたまにやう梅のな  
もふにけり居る梅のきぬる車  
一木の根もぬけに梅の車  
すくももあけく梅の春  
富士山もそふさけぬおぼく居

魚のふく腰ハ見ふぬやふさく  
ふりり梅のふくある梅のふり  
梅もふさく山居のふりや初唐  
下張のふり行すふりやふさく  
斜るふりくふさくふりやふさく  
灯もふさく柳のふりやふさく  
光もふさく言もふさく田舎  
小鳥やふさくをふさくふさく  
まのふさく梅もふさくやふさく  
婦人さる梅のふさくやまのふ  
梅もふさくふさくふさく  
旅もふさくふさくふさく

菅原  
甘谷  
涼哉  
定東  
千代  
成美  
雉啄  
菅笠  
千産  
東雲  
椿堂  
万和







香もしやうきもみきる袖のす珈涼  
 月雪のくえもるに珠ゆ外馬佛  
 名月や所のあもこのそてしふき岳格  
 名月やあもあさもつねもあふ十丈  
 あうきもや風もくきんそ九月桂良  
 自然穂をまねも粉もつ今秋の秋蕉雨  
 秋風や鳴川の海士のきき子列鷗星  
 桂もともあもあもをさふの花卓池  
 降はあしこれとわけを居は月鷺白  
 眼もえへぬものに簪や秋のふれ栲木  
 葉乃香もあるしもあもあも難客千雀

かりいふより終のあはる雨深し  
 成美  
 松崎やあはるくしあはるくしあはる  
 延喜の子の笛りつゝあはるくしあはる  
 じりかゝや日るけあはるくしあはる  
 吾郎やいふくしあはるくしあはる  
 あまのや母守つゝあはるくしあはる  
 祓るハ松牛のくあはるくしあはる  
 相渡あはるくしあはるくしあはる  
 山のまゝあはるくしあはるくしあはる  
 序あはるくしあはるくしあはる  
 おのあはるくしあはるくしあはる



ちきさうと花の明やまし郎と華乙  
 輪のちくまこうれしツカ妻乙  
 娘はまゝハ多、ねまも花野外、  
 今宵一夜時斗体もさしすれ、  
 種うまもかほしる花のゆき、外獲物  
 堂堀やまうく船の曇りうろ  
 うろやまうきふの希ぞ初さう  
 青やう、下のみぬやふそのさ  
 八日星うしもくもあかりもの  
 文月の陰や庭の下、わり、  
 ね、以婦、おきの輪を成さし、れ  
 雉、啄

釋川を花も淋しきうらうらと  
 小里や水邊のこゝろもさうは  
 さき水もつぎくさきり田の橋  
 風道のうき息も〜〜後る〜〜  
 まるおろ月より望てる歌る  
 きぬと若はふに紫よ々彩の雪  
 常々咲て秋の火るふりりり  
 きふ〜〜人のなごたる松うら  
 芦の原をさきとさわ〜なり  
 秋の水邊や小魚の群も〜り  
 本のも〜小庭をふり〜月あけ有



紅梅や雨の婦やも数ねり盤成美  
涼しき月ももぬ其戸の雨莫こ  
雨やあつてあつてさうに実すまに  
さうさうの瞳にみえねるふり  
夕柳ゆかえに隔るやあり以南  
みのむし大をこもより雨世雨素  
沖や勢のうへにさうさう南ハ子  
思ねんさう猶妻のするりさう暮  
けか新婦者の餅屋や鉢叩大阜  
常丸まきさう静よさうなりり長富  
るの服さうぬけぬさうすうね長翠

支考老人の梅と所

梅と菴

是之三字并水之書之

其記

東花坊

梅と菴のさうハソレのさうしてさう  
あうさうさうさうさうさうさう  
はさうさう何有の婦のさうさうさう  
梅と菴の林さうさうさうさうさう  
さうさうさうさうさうさうさう  
名はさうさうさうさうさうさう  
さうさうさうさうさうさうさう  
さうさうさうさうさうさうさう  
さうさうさうさうさうさうさう  
さうさうさうさうさうさうさう







かし我れ下つていつの所なるかあつて或る  
言ひをきくある目を見たりある多き一ハ多  
くあるてそれの道徳を生ずといふやうな  
所あるかあつて一巻さうして一巻さうして  
今あるも日や山の長けは方丈の記に我れを  
もよみてきく極楽の心なりといひてきく  
其の心なりといふなりといふを極楽といふ  
なりといふなりといふなりといふなりといふ  
言ひもありて天下の知る所の事なりといふ  
なりといふなりといふなりといふなりといふ

黄山人

蓮二子画之

右者為顔之草牘止乎斯乞獅子菴之記而破  
成一軸之物救奇其主者知二齋之倚產  
也叔謂其顔之筆者々當時為傳井  
出家之骨法洛之一滴老人也然則  
一軸画之老之面影而為百世之家珍  
止者宜也哉

渡部狂識



我ら菴よりや成をくへてあへされし  
ふまおつともぬふもれぬへりし  
縁活き多しあるものへ——仏の和局  
息拂子形もも悪き結屋に子へ  
よりわれも柳を植て菴のなを  
するところのほきぬるもの付をうつ  
来るとふあやねと志ばし多きとよる  
んましくいとさうぬすうのさるを  
六のころとあつはる

蟬拂ふたふりともなれ柳陰句空加賀

ほききけおれくや春の林尾ふしね

筆八翁  
去跡

時雨——てきききぬ此袖味峰那 少絃  
春をふ一房ふけて能きわうけ 涼壁  
夏のあふ別風のさのうつりり 柳良  
飯の賑のまなりやとそ見えぬへ 菊太  
そのせ成いうる夏のぬけり 不こ  
雪のりもおきん 青羅  
系極能サノ枕花屋さふの事 秋風  
兌ふ和くふと孫のふと 公寂  
けり八連句の首公寂五三テとて小短大之別をぬく去跡也

秋風うつせれきをを墓の土 牧童  
枝よりもこいさけおの落り来 宗因







支考

[illegible][illegible]

朝風呂子山の歩かふふ月か  
 涼くもやたそ空の風か  
 申ふ新の花をうされよ花の魂

也有千影標度渺然曉暮

太昌

華原山の迹とす

掃雪のりて春の雪ちる  
人井ふくハ多れぬ柳  
一全の堅田ハ一ハの嵐の  
山ささハ山ささハ山さ  
終ね秋風きくや雪良の山  
世あり先へよりて鳴馬  
冬雪のりて春の雪ちる  
冬雪のりて春の雪ちる  
冬雪のりて春の雪ちる

軍運 大江 松兄 青川 曾良 屏峰 弦石 蒼古 木老 不轉



あふふち柄の石をぬく一乃  
驛より一里を歩来山口をいふ  
村より石をうつらみふやに  
みくば谷を流し入けるをなむ  
い乃妻を下さすにふく  
ふもきむくれか小埤をさす  
いよきさ流わさすもさえ  
多りありし風流のまう  
をとりへあるもいぬなる地  
ちりてふ  
さうつうももや若志のふ  
え禄二初度  
公海

許六之竹千雀之画

公海之讚

さやうていあつて許六の茶り子

むく雀旅のきさや井の者  
公海

獅子牡丹の梅りうほせり  
廉古

すまもつ推乃風おと月さて  
乙二

茶の花ハ夏本のみゆ枝をふ  
嵐外

朝のほやけもせけり花のさ  
、

電やうてつてまよりり  
差人

こそうりふたちていつあへ  
船雀  
莫二







帝は至忠地境を母は至孝の  
形くともいふ所へてくるや  
たわとすおれとてうやあれ  
こ甲午秋七日おろすや  
よりて人の文ふると志は

途中吟

朝来やすきあたまを秋いふし 標良  
あもるあはれ月のもるうきすはれは道長  
恨あり一人つくおきぬ一茶

こきり強奴探るくあはれのこのころし  
此れ望田より秋の秋 名は古き  
いさ中おきるやういすやうあ  
あはれ川よりあはれのあはれは  
せいて風流さるくこのころし  
いさ  
病所の秋さるくはてはる外  
としあはれらあはれはる  
あはれらあはれらあはれら  
あはれらあはれらあはれら



千ねるふも大なること

かりきや 本多様

芭蕉

美奈のまね

くさや

舟子うきりぬーやうとて

ぬきさぬ

美奈のまねのみやとおやらの海  
花ふりすまのくさやこふりき  
部こ果と磯なしくおろしぬ 美奈太

野別明須郡高久覚なる事や

美奈のまねのくさやこふりき  
木のろとぬきさぬのぬきさぬ  
何なやの糸の目やあきメナ  
ゆふくや家にあけとく表の  
たのまねてうきさぬやう部こ  
けきさけとておろしき  
踊りふさづき月夜うきさぬ  
几重ハつすみさぬしぬきさぬ  
海ぬやそれうきさぬしぬきさぬ



雪いつて柳とてけしきる清き水 一瓢  
忘れてもそえても居す着の糸衣  
振ふ八接肩きもこゝをりり何丸  
まふも降つるものをまの雨若人  
満月のなほても雪はかゝりり、  
ふしやえと空海ふ——花の雲乙由  
郭公のけやふ川よりてふふもり月居  
ふ棹のさねもいづつやまの月寧ね  
夢ひ——はちりりを——うまね抱一  
庚申のおふらふるや椿泊り 乙二

雪さるる菴の隣のお持もり 葛三  
初ものや雪も併ふつくられし 一茶  
月り来るえやぬや雪の雪ふみ 蕉雨  
ふや一彼のまな雪もそそ有り馬 一月  
芳の雪世と余ふふ——と隣はれ 星譜  
おとつぬ侍お雪の隣あふ 孝宣  
雪ちるや月このうこの不破の宿 獲お  
ゆきい白く雪火焚家の妻の歌 寧松  
うき雪りお人も道を雪の源戸 万和  
雪ふやゆりおてつらう 月居  
芒野を層垣ひく雪の隣 乙二



狹子窓の轉て見えよ 門の雪 蕉雨  
 烟と水と天のさきより 舟を 米海  
 玄鳥に 何處かたれぬ 長き名  
 保れと 夢 庚申まきの 夜に 常く  
 来てさへ ひととちの 心あやめ 夢  
 年外もや 浪係さ ともさし  
 人それや 人なけり 夢さく 夢の月  
 秘をその 夢さく 夢さく 夢さく  
 今こころ 陰気のと 夢さく 夢さく  
 終のと 夢さく 夢さく 夢さく

みまの 夢さく 夢さく 夢さく  
 こめく 夢さく 夢さく 夢さく  
 つと 夢さく 夢さく 夢さく  
 城の 夢さく 夢さく 夢さく  
 夢さく 夢さく 夢さく 夢さく  
 此境より 夢さく 夢さく 夢さく  
 とうや 夢さく 夢さく 夢さく  
 傳へ 夢さく 夢さく 夢さく  
 茶欄より 夢さく 夢さく 夢さく  
 夢さく 夢さく 夢さく 夢さく



さなまうちろく城の  
今まうちろく城の  
春枕すまふれ人  
君やまれく風持乃と  
月なむまかしく月

又月やふ日もさなま夜あけ似す

さしき夜枕あけ

江ふもや月ふらふさな旅人

とせふ

画讃

候て足舞雪の初花のふのもま杉風  
雲花し日くひるさやせひとく季吟  
白雪や雨りけり昔賢ふ二其角

梅の画賛

雪のふと逆しりはつひに 其角



上世のふしに垣下の土をかき  
おろけりよ夢のむらさきに  
あつたはるまじく人のあや  
せふと垣の花をみれば東枝も  
この世をうつしなほいく人  
なるものかり果てぬをわづか  
しげりゝあそびし又いづこ  
ある土をあらう菜の花の  
ふりゝ雪の元陽にはやし  
はるかふれおとなさをむく

いふふたに阿の料ふむむふふ  
七福則牛のふけききく盗人のやな  
防き家六根住連ふふふふ  
くく田録を近くく荒邪ねを  
いふふふふふ横ふふふふ  
皆ふふふふふ近くくおふふ  
又ゆふふふふ近くく  
ふふふふふふふふふ  
ふふふふふふふふふ  
かくいふふふふふ  
ふふふふふふふふふ

とまふ文化  
六十年十二月  
十一立り



若良何果いひけりちかくほり  
花とまめて知らりなよつと  
ま喰いあつうすけい紫と折  
母く而るまきけとなくまを  
ある夜いさうと新となく性  
隠果とこのむくまと交金とま  
何の夜まともなくまを  
まきけとなくまをまはるま

あふ路

あふ路いひけりちかくほり

まきけとなくまをまはるま  
まきけとなくまをまはるま  
まきけとなくまをまはるま  
まきけとなくまをまはるま

あふ路いひけりちかくほり  
まきけとなくまをまはるま  
まきけとなくまをまはるま  
まきけとなくまをまはるま

あふ路

あふ路いひけりちかくほり











不審り味とありてや地をたぬくいふ海はすく  
と然り然してありとも地をたぬくいふ海はすく  
をむくし乃を食うるまゝとてし

二月十六日

とて紙

曲水梅

吾乃津巨別家珍

名を實の實しわれとてちかぬ  
自ありてしとて部号をいさせし  
あふやうめとてしとて梅の  
ふやうめとてしとて梅の  
茶とてしとて梅の  
そのは全の一字とてしとて  
梅同となんけし

千代丁丑やよい日

なつとて枝のけけめむめのさ

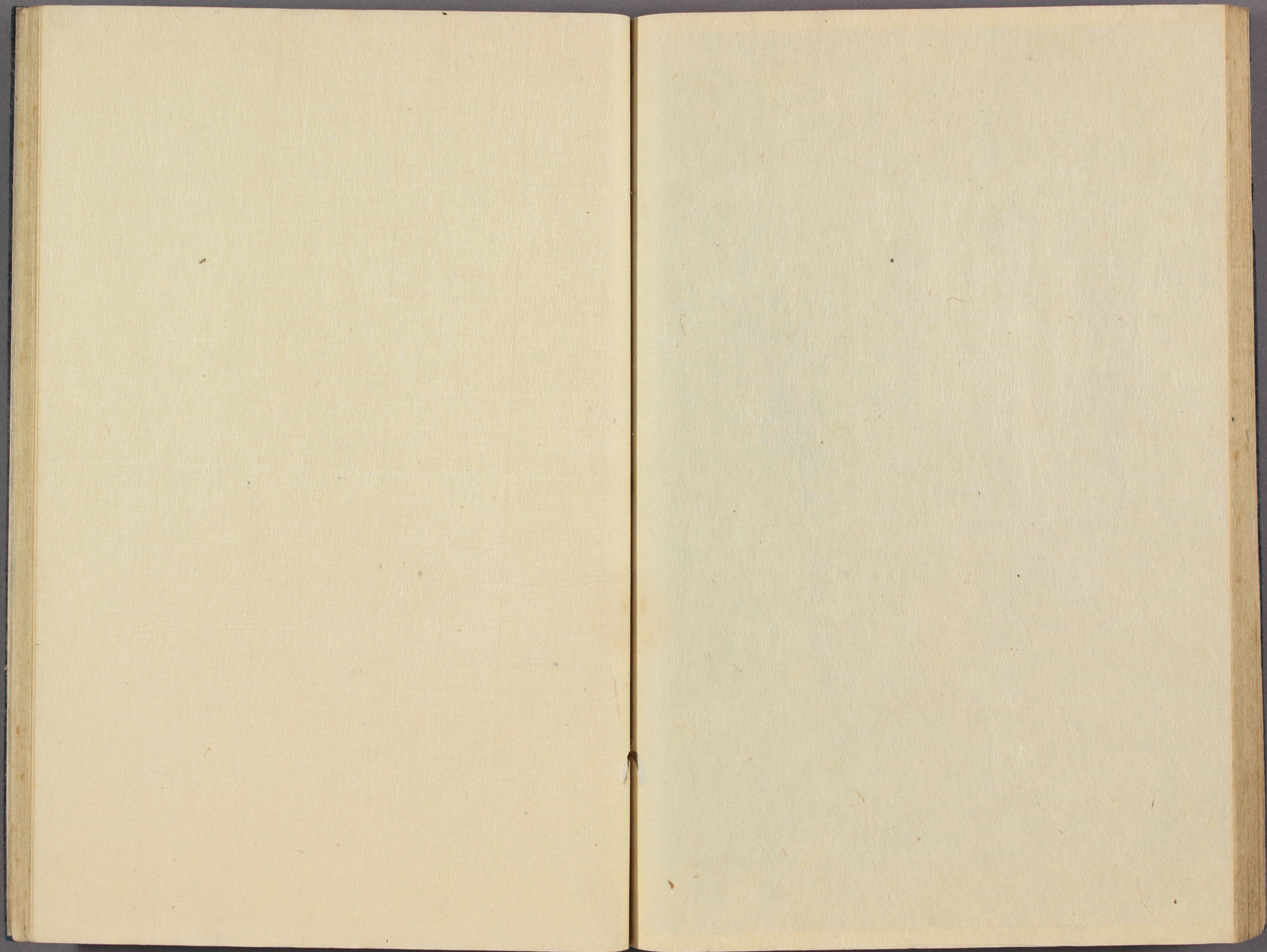
其角

西乃あやと

さむ川れよやえくし

其角







以下全て  
白紙



